

アンコール遺跡群から学ぶ遺跡保存と活用

李素妍

Conservation and Utilization of Ruins Learned from Angkor Ruins

LEE Soyeon

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第14巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.14 / No.2

平成30年3月12日発行 March 12, 2018

アンコール遺跡群から学ぶ遺跡保存と活用

李 素妍*

Conservation and Utilization of Ruins Learned from Angkor Ruins

LEE Soyeon*

キーワード：カンボジア、アンコール遺跡群、直浪遺跡、保存、活用

Key Words: Cambodia, Angkor Ruins, Sukunami Site, Conservation, Utilization

I. はじめに

鳥取大学国際乾燥地域研究機構では砂丘に関する研究がおこなわれている。その研究グループのなかに歴史・人間活動グループがあり、砂丘遺跡の調査とその保存・活用について研究している。歴史・人間活動グループでは山陰沿岸部に豊富にみられる砂丘遺跡の調査をとおして、地域における人間活動と古環境変遷を明らかにすることを目的としている。砂丘遺跡の保存に関してはその研究テーマが世界的に見ても希であり、砂岩を用いたカンボジアのアンコール遺跡群が参考できると考えた。カンボジア遺跡保存をおこなっている日本国政府アンコール遺跡救済チーム（JAS）の作業現場をみてアンコール遺跡群に関する情報を得た。現在、その取得した情報を活かして砂丘遺跡の保存方法に関する実験をおこなっている。

本稿では東南アジアに位置するカンボジアの遺跡保存と活用を紹介し、その情報を砂丘遺跡の保存・活用にフィードバックする方法を探る。

II. アンコール遺跡の保存と活用

1. アンコール遺跡の歴史

アンコールは、カンボジアの首都プノン・ペンの北西にあるシエム・リアップ市の郊外にある東南アジアの主要な考古学遺跡群の一つである。1860年にフランスの博物学者アンリ・ムオによって発見され、その後、本格的な調査・研究が開始された。アンコール考古学公園は、熱帯雨林地帯を含む400km²に広がる。この巨大な都市遺跡は、9～12世紀のクメール王国の歴代の王によって築かれたが、1431年も隣国タイのシャム人の侵攻によって破壊された。なかでもアンコール・ワットはアンコール最大の遺跡で、クメール芸術の最高傑作とされた都城に付属したヒンドゥー教寺院として、スールヤヴァルマン2世によって、約30年の歳月をかけて建立された。周囲は、5.4kmの環濠に囲まれ、本殿を中心とする5基の堂塔から成り立ち、数kmにも及ぶ回廊の壁面の神話をテーマにした浮彫りは第一級の芸術作品とされている。また、アンコール・トムは、カンボジア内戦で荒れ放置の状態が続き、ユネスコは、人類の文化遺産であるこれらの象徴的な遺跡を救済する為、危機にさらされている世界遺産リストにも登録し、広範な保護計画を実施している（世界遺産総合研究センター編，2001）。図1にアンコール遺跡群の一部の写真を示す。

*鳥取大学地域学部地域学科国際地域文化コース

2. アンコール遺跡の概要

アンコール遺跡は、シエム・リアップという町の周辺に点在するヒンドゥー教・仏教建造物である。9世紀～15世紀の間にクメール人（カンボジア）によって建てられ、主要な遺跡だけでも40ほど存在している。アンコール遺跡というのは、このシエム・リアップ周辺のことを指し、それ以外のものは、アンコール遺跡も含めてクメール遺跡と総称されている。カンボジア国内には、アンコール遺跡以外の主要なクメール遺跡として、カンボジア北部にあるバンテアイ・チュマール（Banteay Chhmar）、プリア・ヴィヘア（Preah Vihear）、コー・ケル（Koh Ker）、コンボン・スヴァイ（Kampong Svay）のプリア・カーン（Preah Khan）、ベン・メリア（Beng Mealea）、バタンバン（Battambang）周辺のワット・エク（Wat Ek）、ワット・バナ（Wat banan）、プラサート・バセツ（Prasat Baset）、プノン・ペン（Phnom Penh）南にあるトンレ・バティ（Tonle Bati）のタ・プローム（Ta Prohm）、プノン・チソール（Phnom Chisor）、コンボン・チャム（Kompong Cham）のワット・ノコール（Wat Nokor）などがある。さらに、タイ東北部やラオス南部にも多くの遺跡が存在し、大小合わせると5,000を超えるともいわれている。アンコール遺跡を訪れる観光客は近年急増しており、2007年における外国人観光客数は110万人を突破している。2007年度末にはアンコール国立博物館がオープンしている（内田，2011）。



図1 左上：アンコール・ワット，右上：パイヨン，左下：象のテラス，右下：バンズテアイ・スレイ

3. アンコール遺跡保存に対する世界各国の挑み

前章で紹介したようにカンボジアには多くの遺跡が存在するが、内戦によって破壊された遺跡や深い森の中で崩壊が進んでいる遺跡もある。しかし、カンボジアの経済は安定していないためにカンボジア人だけで遺跡の保存・修復をすることは難しい。各国の研究チームがアンコール遺跡群の修復・保存活動に協力している。最近では、日本以外にフランス、ドイツ、インド、中国、イタリア、アメリカ、スイス、インドネシアなどのチームがアンコール遺跡の修復・保存に貢献している(内田, 2011)。各国が遺跡の保存修復をしているとき、必ず遺跡の入り口に保存修復に関する説明看板や国旗を設置し、観光客の理解を深めるために努力している(図2)。



図2 アンコール遺跡群で保存修復をしているドイツ

日本からは、日本国政府アンコール遺跡救済チーム(Japanese Government Team for Safeguarding Angkor: JSA)、上智大学アンコール遺跡国際調査団ならびに独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所が修復・保存活動に協力している。JSAは、既に、アンコール・ワット最外周壁内北経蔵、バイヨン北経蔵、プラサート・スープラ N1 および N2 塔の修復を終え、2010年、バイヨン南経蔵の修復を行うとここに、バイヨン中央塔の永久的安定策および内回廊レリーフの保存法の策定を行なっている(内田, 2011)。

4. アンコール遺跡の現状と管理

カンボジアに行ってアンコール遺跡の保存状態および日本国政府アンコール遺跡救済チーム(JAS)を訪問して研究活動をみた。カンボジアで訪れた遺跡は17カ所であり下記する。バンズテアイ・スレイ、プノン・バケン、ベン・メリア、バコン、タ・プロム、アンコール・ワット、バイヨン、パプーオン、プリア・コー、ロレイ、プリア・カン、象のテラス、トンレサップ湖、プノン・クロム、プラサット・クラヴァン、プリア・アントン、プノン・クーレンである。

17カ所の遺跡がすべて保存状態がよいとは言えないが、その状態が悪くても観光客に人気が高い遺跡もある。アンコール・ワット、タ・プロムおよびベン・メリアは多くの観光客が集まり、そのなかでもアンコール・ワットは遺跡の保存修復事業によって整備されている。しかし、タ・プロムは内戦によって樹木の管理がされていないため、成長した樹木が遺跡の損傷原因になっている。ベン・メリアは深い森の中に遺跡が位置しており、内戦の影響で遺跡が崩壊された状態である(図3)。タ・プロムおよびベン・メリアは観光客には危険な遺跡であるが、多くの人が訪れる。一方、プラサット・クラヴァンは921年に創建されたレンガ造りのヒンドゥー教寺院であり、1964年フランスによって修復されて保存状態がよい(図3)。しかし、この遺跡を訪れる観光客の数は少なかった。



図3 左上：タ・プロム，右上：ベン・メリア，下左右：プラサット・クラヴァン

遺跡劣化の要因は温湿度や雨などの自然環境が主な原因であるが、遺跡の観光化にともなって観光客による影響も多くなっている。例えば、人の歩きによる振動が遺跡劣化に関わると懸念されている。これらの状況からみると、遺跡を取り巻く自然環境のほかに社会環境の変化に合わせて保存管理すべきである。

日本政府アンコール遺跡救済チーム (JAS) は、アンコール・ワットやバイヨンなどの遺跡の保存修復をしながら研究成果の情報発信および人材養成を積極的におこなっている。研究成果の情報発信として、研究報告および観光客への説明をおこなっている。バイヨンの近くに小屋をつくって研究内容をパネル展示して情報公開している。またバイヨンで研究員が作業しているとき、観光客が作業について質問をすると丁寧に答えている。この目的は、遺跡に関する人々の関心を集めるとともに遺跡の情報を発信することである (図4)。人材育成の目的は将来、カンボジア人で遺跡保存や管理ができるようにカンボジア人を JSA のスタッフに採用している。そのスタッフは JSA のオフィスを訪れた人々に JSA 事業に関する案内および説明をしている。そのほか、カンボジアの政策であると考えられるが、地域住民が雇われて遺跡とその周辺を掃除していることをみて遺跡が地域発展につながっていることがわかった。

日本政府アンコール遺跡救済チーム (JAS) がアンコール遺跡群でおこなっている活動をまねて砂丘遺跡に活かすことができると考えた。鳥取砂丘は鳥取県東部に位置する日本海の海岸線に沿ってできた典型的な海岸砂丘であり、多くの観光客が訪れる。鳥取砂丘に立地する遺跡として古くから知られてきた直浪 (すくなみ) 遺跡がある。これまでの直浪遺跡に関する研究調査によると、直

浪遺跡は砂丘の発達と人間活動の相互関係史を把握するには、極めて好適な条件を備えた遺跡である可能性が高い（高田ら，2015）。



図4 上左右：日本国政府アンコール遺跡救済チームのオフィス，下左右：バイヨン近くでの情報公開

直浪遺跡は鳥取砂丘に生きていた人間生活に関する情報を潜んでいる魅力的な遺跡である（図5）。しかし、観光客は砂丘を知っていても砂丘周辺の遺跡について情報が少ない。

ここで我々に必要なことが、遺跡エンジニアリングであると考えた。遺跡エンジニアリングはカンボジアのアンコール遺跡に適用されるために作られた方法論である。この方法論では遺跡活用の形として、遺跡の意味・価値・重要性を中心にして学術振興、遺跡の保存修復、人材の育成、学校教育・生涯学習、文化観光振興、社会文化発展へのアプローチを提案している（図6）。

これは遺跡の価値を地域社会に連動して末永く遺跡を良い状態で活用・管理する仕組みである（遠藤，2001）。この方法はカンボジアを含めた東南アジアの遺跡保存・活用に使われている。今後、直



図5 直浪遺跡の発掘調査

浪遺跡を保存・活用するためには、学術的研究とともに遺跡を資源としてみた遺跡観光化、地域住民の生活向上に役立つシステムを必要とする。

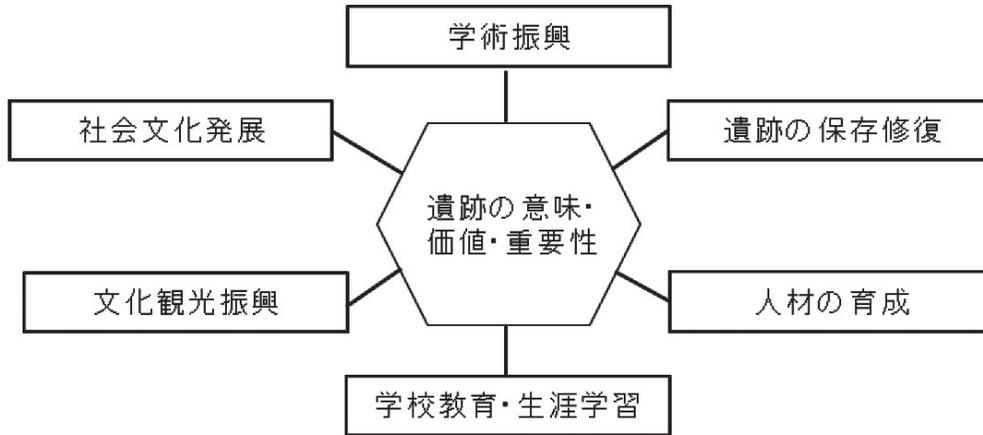


図6 遺跡エンジニアリングのアプローチ (遠藤, 2001)

Ⅲ. まとめ

カンボジアのアンコール遺跡群の事例のように遺跡を活かすということは、よい技術を使用した保存修復だけでなく、その効果が持続できる社会の仕組みが重要である。直浪遺跡を地域の資源に活用するために以下の活動を提案したい。第一に、直浪遺跡について一般に広く知らせる広報活動、第二に、地域住民や観光客の向けのワークショップによる遺跡の情報発信、第三に、遺跡の研究活動がわかる専門スタッフの人材育成、第四に、地元住民の協力をもとにした遺跡管理である。遺跡を守るためには研究や行政のサポートが必要であるが、それを長く維持することは遺跡への地域住民の関心が欠かせない。これらの活動をとおして砂丘遺跡の保存、活用および地域振興につなげていくべきである。

引用文献

- 世界遺産総合研究センター編 2001 『世界遺産事典』 図書印刷株式会社, pp. 4-18
 内田悦生 2011 『石が語るアンコール遺跡』 早稲田大学出版部, pp. 2-11
 高田健一, 中原 計 2015 「鳥取市福部町直浪遺跡における考古学的調査」 『地域学論集』 12, pp. 211-226
 遠藤宣雄 2001 『遺跡エンジニアリングの方法』 鹿島出版社, pp. 28-39